



評議員会の後、記念撮影
民族衣装は、色鮮やかで美しい。
正式な場合は沢山の装飾を着ける



国の発展のため、様々な事を学んで帰りたいと、鳩山由紀夫理事長に熱い思いを伝えた

六月三〇日(金)評議員会に報告の為出席した三人は、民族衣装に身を包み、研修の成果を発表した。三人は異口同音に「出会った人々の優しさが印象的だった」「学習したすべてを国に持ち帰り、ミャンマーの発展のために役立てたい」と述べていた。



在日ミャンマー学生連盟の方々から、ボンさん、ミヨウさん、ミヤットーさん



三人の研修生
左から、アウンさん、ウィンさん、エイさん。民族衣装が美しい



鳩山由紀夫理事長に竖琴のレプリカをプレゼント。「ビルマの竖琴」に登場する竖琴である

今回のプロジェクトでは、在日ミャンマー学生連盟のミヤットーさん、ミヨウさん、ボンさん、そしてご家族の皆さまの多大な、献身的なご協力を得たことを、ご報告し、紙面を借りて御礼を申し上げます。また本プロジェクトの主旨をご理解頂き、見学など快くお許しくださった各企業の皆さまにも、心より御礼申し上げます。

* このプロジェクトに関する詳細な報告記事は、次号に掲載予定

たち。私はどの出会いも忘れることはできません。今回の出会いが、私の成長と新たな出会いに繋がると信じています。

9日間の感想

岐阜大学 医学部医学科 1年 林 有里紗

ウィーンで過ごした9日間は、私にとって様々な方面から学びを深めた、かけがえのない時間として刻まれた。

「百聞は一見に如かず」ということわざがあるが、まさに今回の事業をよく表していると感じた。通常の旅行では決して訪れることのできない場所をも訪問させていただき、私に貴重な機会を与えてくださった日本友愛協会ならびにOJABの方々に感謝したい。

そんな充実した9日間を、私は移民・難民対策の観点でまとめてみようと思う。主にBPI der OJAB (以下BPIと表記する)とOJAB本部、そしてオーストリア外務省にお伺いした際に学んだことを中心に述べておきたい。

OJABは主に青年、高齢者、教育・融和の3つの分野で活動する非営利団体である。そしてBPIはそのOJABが運営する、恵まれない人々や難民のための職業訓練学校のような施設であった。

BPIでは施設の説明を受けた後、突然ドイツ語の授業を見学し、参加することになり、生徒との交流の機会も与えられた。その後は金属加工、ガラス加工、電気などの



マダム・タッソー館は皆気に入っ
たようだ。エリザベス女王とツィ
ンシュット!
林 有里紗さん

コースの職業訓練を見学し、少し体験もした。OJABが掲げる、どのような社会的背景をもつ人にもチャンスを与え、学びを支援するという目的をまさに



エヤップ本部の玄関で記念撮
影。後ろに見えるのは教会の鐘
の弁。苦しい時代を忘れないた
めの象徴

体現した活動であると感じた。しっかりした指導者のもと、コース別の認定を得られればそれを確かな自分の武器にできるというのは、単純なシステムだけれど就職と自立を目指す人々にとって非常に重要であるはずだ。

そして融和し職を得て働く上での大前提となるのがコミュニケーションである。ドイツ語の教室にはシリアをはじめとする多くの難民、移民がいて、私からすれば流暢なドイツ語を話していたけれど、そこに至るまでに彼らが必死に努力してきたのだと考えると、当たり前のように自国で生活できる自分たちがどれほど楽に生きているのかに気づかされた。交流時間が短かったため、彼らの境遇についての質問をすることに躊躇したことは心残りである。

その日の午後訪れたOJAB本部では、OJABの活動についてのプレゼンテーションを聞き、BPIで体験してきた教育・融和の分野に対する理解を深めることができた。

だが、私はこの時点でまだ、ここでの話がその後訪問したオーストリア外務省でつながってくるとは思ってなかった。

オーストリア外務省の主な役割として、国境の安全を守る、合法的な移住方法を制定するなどが挙げられ、やはり移民や難民の問題が重視されているのは明らかだった。ドイツ・オーストリア・スウェーデンが主な受け入れ国であり、リビア・シリア・旧ユーゴスラビア諸国からの移民が多いこと、それでも国民の80%は移民ではないことなど、詳細に説明していただいた。ここでもOJAB同様「調和」というキーワードが出たが、驚いたのはそのために言語と教育が重要だということだった。これ

(3面につづく)

ウィーンでの出会い

東北大学 法学部3年 坂本 卓哉

ウィーンを訪れて、私はそこに住む人々がとても印象的でした。国際色豊かで、街中では至る所で様々な言語が飛び交っています。一目では誰がどこの国の出身か、判別できません。実際に現地の人と話してみると、ウィーン出身だという方にはあまり会いませんでした。ドイツ、クロアチア、イタリア、トルコ、シリア、中国、他にも世界中から人が集まっています。



ヴァンティーフ教会の前を、ウィ
ーン名物トラムが走る。ナイス
ショット!
坂本卓哉さん

私が特に印象的だった出会いは二つあります。

ノイマルガルテンという老人ホームと幼稚園が組み合わさった施設のスタッフやそこにすむ人々、職業訓練場でドイツ語の授業を受ける難民の方々との出会いです。

前者について、私は真剣に話をしてくれたスタッフのマティルダさんの目と笑顔が忘れられません。オーストリアの介護状況や難民の受け入れ状況など、私たちが質問すると、彼女はし



老人ホームでの健康づくり体操を体験。介護士不足には至っていないという説明に驚き。外国人労働者の採用が、安定した介護の実施を支えている

っかりと、的確に、そして被介護者や子供たちへの優しい気持ちをいっぱいにして答えてくれました。オーストリアでは日本ほど、介護士不足に悩まされていないことには驚きました。しかし、それは外国人労働者で補っているからこそ、成り立つもの

のなことでした。彼女のその目は事態を重く見つつも、時折見せるその笑顔は、心からの慈愛を感じました。施設には運動の時間があります。椅子に座りながらダンスを踊るというもので、意外と体力を使い、いい汗がかけます。楽しい振り付けで、誰でもできる簡単なものでした。陽気なおばあちゃんを講師に、見よう見まねで、聞いたことのある音楽に合わせて、手足を動かします。20分程の短い時間でしたが、元気をもらえました。

後者について、ドイツ語の授業を受ける方々にはシリア周辺から来た人が多かったです。私はドイツ語を2年程、大学で学びましたが、話すことに関しては彼らには敵いません。授業は生徒と先生の掛け合いが多く、笑いが絶えませんでした。授業が終わると、私はいくつか尋ねました。「ご飯が恋しくありませんか」といった簡単なものから、「故郷に戻りたいですか」といった難しいものまで。人によっては不快に思う質問も、彼らは真摯に答えてくれました。「私たちの主食は米ではないから大丈夫!もちろん帰りたいです。私たちが戦争で破壊された街を立て直すのです」と。その言葉と表情は今も目に焼き付いています。

今回の訪問での出会いはすべて一期一会でした。

プログラム中、常に私たちを導いてくれたリサ・フィッシングさん。時間の合間を縫って会ってくださった多くの方々。ホテルの受付の気のいいお兄さん



いきなりの折り紙教室開催。女子は器用に鶴などを披露。男子学生は、苦戦しながら紙飛行機などを製作。年齢を超え、国を越え文化の交流は素晴らしい事だ

国際交流事業／エヤップへの研修生派遣 何を見て何を学んだのか―六名の研修生がそれぞれの感想を綴る

難民への取り組み・国連訪問―新たな世界に目を向ける
オーストリア外務省・在オーストリア日本大使館訪問―様々な貴重な体験を
若者らしい感性で見つめたオーストリア及びエヤップの報告

二月十七日から二十六日までの九日間、六名の大学生が姉妹団体であるオーストリアのエヤップに派遣された。(『友愛』 五四六号・三月号一部既報)。大学も学年もまちまちな六名は、協力しエヤップの用意してくださった多彩な研修内容を全てこなし、元気に帰国した。六名の大学生が、それぞれの言葉で綴る報告記をお届けし、この事業の報告としたい。
―各人の思いを直接的にお伝えするため、アルファベット等の多い文章を横組みで掲載いたしました。掲載の写真も各人が撮影したものです。(掲載順不同)

度の知識ではあるが、ソクラテスのこの言葉は、「知らないということ」を知ることが、真の認識に至る道であるという意味であるという。今回の研修は、自身の知識や思考に対する認識を変える経験が多く、それと同時に自身の甘さを痛感したものであった。



ウィーン名物のチーズ入りソーセージのホットドッグを手に。奥の坂本さんはベグルかな？感想は驚くほど美味しかったとのこと 戸澤春奈さん

私自身は幼少期をスペインで生活した経験から、オーストリアもヨーロッパである以上、およそ同じ雰囲気であるのだろうと想像していた。

しかし、建物にほどこされた装飾や彫刻、慎重に設計された道路、隙間なく立ち並ぶ色とりどりの建築物はバルセロナでみた光景とは別物であり、市内観光を通して、異なる歴史や外国との関係から築かれた東ヨーロッパ独自の文化を垣間見ることができた。特に印象的であったのはシュテファン寺院である。荘厳な石造りの教会の屋根に、緑や黄色の鮮やかな色と模様はほどこされており、それらが違和感を抱かない程絶妙に合っている、その色彩感覚がどこから生まれたのか不思議でならなかった。

エヤップの施設に訪問した際に、移民や難民である若者向けのドイツ語の授業に参加し、彼らと交流する機会があった。彼らの発言から、日本のイメージは先進技術や、漫画、アニメなどのサブカルチャーが強いものの、中国や韓国との区別がつかないアジアの国というぼんやりした認識であるように感じ、自国を理解されていない気がして少し残念な気持ちになった。しかし、私が抱いたその感覚はまさに、私がオーストリアをヨーロッパ圏の一国として捉えていたのも全く同じことであることに気が付いた。少量の知識に満足し、真の姿を知ろうという思考を放棄してしまうことの危うさを感じた瞬間であった。

私がオーストリア研修で特に関心を抱いたことは、難民問題の現状であった。戸澤教授の国際関係論演習で中東の問題に焦点を当てて学んだため、難民問題に関する新聞記事等を目にしていたし、今回の研修に臨むにあたり、難民問題に関する新書も読み予備知識を備えてきたつもりであった。しかし、実際にオーストリアを訪れてみると、各訪問先で、遠い日本の地では全く感じることがなかった難民流入に対する他人事ならぬ緊迫した空気や、問題の深刻性を肌で感じることができた。



国連CTBTOで、セルボ事務局長を囲んで記念撮影。国連で働く日本人の方が輝いて見えた。CTBTOの機能にも驚き、世界が一つになる必要を痛感した

例えば、エヤップが運営する老人ホームでは既に元難民の老人家族を受け入れ始めていたし、オーストリア外務省やエヤップのペトラ氏によるプレゼンテーションから、オーストリアがそれぞれの立場でいかに難民の人権確保と国内の治安の両立に尽力しているかを理解することができた。またもや書物からの知識に満足し、少し知ったつもりになっていた自分の甘さを痛感した。



エヤップで、エヤップの実施する事業、難民受入事業など詳細にわたってレクチャーを受けた。ペトラさんは終始その意気込みを熱く語っていた

国連訪問ではCTBTO(包括的核実験禁止条約機関準備委員会)のオフィスに伺い、日本人職員3名が分刻みの多忙なスケジュールの中、世界中の人工的な地震やガスの拡充などから世界中の核実験の様子をリアルタイムで把握していることを解説して下さった。国連職員になることを志望している自身にとって、この訪問は世界の問題解決に携わる国連の魅力を一層感じるものとなり、非常に貴重な機会であった。また、自身が日々過ごしている安定的な生活は、見えない部分で平和を提供する存在によるものであると改めて感じた。

今回の研修では、他国や抱える課題について理解するためには、現状に満足せず、自分が「知らない」ことを自覚した上で「知」を追求し続けること、また、実際にその国の空気に触れることが重要であるということを感じた。学生の身分では訪問し難い場所への訪問など、このような貴重な研修の機会を与えて下さった日本友愛協会に心からの御礼を申し上げたいと思う。

今回学んだ事を、残りの学生生活やその後の社会人生活に生かしていきたい。

九日間の感想

早稲田大学政経学部3年 田島莉子

わたしにとってこの九日間は、一言で言えば未知との遭遇にあふれた毎日でした。一週間強という短い期間ではあったものの、出発前はオーストリアへのフライト前日に初めて会ったメンバーと共に過ごす日々への期待と不安でいっぱいでした。しかしその不安はすぐに消えてなくなり、素晴らしい仲間や友愛協会の方々、エヤップの皆さん、そして現地で私たちを歓迎してくれた皆さんのおかげで、最高の九日間になったと胸を張って言うことが出来ます。

オーストリアでの初日は、現地でガイドをしてくれたリサと一緒にウィーンの街を探索しました。ヨーロッパが誇る伝統と芸術の街を、めいっばい楽しむことができました。ツアーなどで行くいわゆる定番の観光地だけでなく、ウィーンをよく知るリサならではのコースで、ウィーン中のお店や名所に案内してくれました。彼女はいつも私たち学生六名の中心で明るく私たちを引っ張ってくれる存在でした。ウィーンに滞在していた期間中に築いた彼女との友情は、私たちにとってかけがえのないものです。

(4面につづく)

(2面よりつづく) はOJABと全く同じ考えであり、BPIで言語と技術の教育がすでに進められているのを知ったばかりの私は、今後の移民・難民対策への期待を感じずにはいられなかった。一筋縄ではいかないが、官民両方からアプローチするのは大切だと思う。



このように、移民・難民対策にオーストリア外務省を訪問。丁寧な説明と暖かい焦点を当てたが、多方面から得るもてなしに大感激。エヤップのペトラさん(左かものが多かった9日間であった。ら二人目)戸澤教授(三人目)も一緒に記念撮影 今回の旅を生かして、他のヨーロッパ諸国を訪れるとき違う見方ができるのではないかとと思う。

ウィーン研修日記

早稲田大学政治経済学部政治学科3年 荒石浩司

初日。距離約9000キロを超えて、はるばるやって来たオーストリア・ウィーン市。なくさないようにパスポートを握りしめるのがやっとの私に対して、飛行機で隣り合った見知らぬ外国人に「Are you Austrian? Uh huh?」と流暢な英語で話しかける慶応大学医学部1年佐藤。積極的な国際交流に圧倒された。

二日目。ウィーン大学で日本語学を専攻している美人ガイド、リサに連れられてウィーン市内を観光する。ギリシャ様式、ロマネスク様式、ゴシック様式など伝統的建築様式が混在している街に、路面電車が横切る風景が優雅である。感動して路面電車の写真を撮りまくっていたら、鉄道オタクの撮り鉄扱いされてしまった。

三日目。引き続きウィーン市内を観光する。午前中はマリア・テレジアの生家であるシェンブルン宮殿、午後はプラーター遊園地を巡った。プラーター遊園地にある大観覧車はウィーンのシンボルとなっている。遊園地内に併設されているマダム・タッソー館で、ジャスティン・ビーバーやトム・クルーズとパシャリ。

四日目。今回の研修派遣受け入れ先であるオーストリア勤労青年連盟OJABが運営する老人ホームを見学した。日本の老人ホームは、高齢者が一人で出歩くリスクを考慮して、活動を制限する印象があるが、OJABでは、幼稚園を併設したり、庭があったりと可能な限り入居者の自由を追求している。世界中から入居希望者が集まるというのも納得である。としみじみしていたら、急遽折り紙教室が開催され、日本人の私たちは講師を命じられる。鶴やパッケンチョコを器用に折れる女子とは違い、何も折れない私は大弱り。急ごしらえで紙飛行機を作成したものの、当然上手く飛ばないので腕力で補い、遠くに飛ばした。

五日目。本日の予定は、ウィーンの市場を見学した後、JTのオーストリア支社職員Schusterさんと昼食会。煙草はカフェと同じように文化を彩るものとして認知されているという話を聞き、確かにオーストリアでは路上喫煙に対して寛容であると納得した。昼食は、高級レストランでステーキを頂く。この時ステーキをよほど美味しく食べていたのか、OJAB職員ペトラさんに、肉が好きなキャラクターとして認知される。

六日目。日本大使館で小井沼オーストリア特命全権大使とお会いする。「オーストリアは観光立国ではなく、実は産業立国であり、日本と似ている。日本との観光客の行き来が少ないため、そこを強化したい」というお話が印象に残った。

七日目。午前はOJABの難民や若者を支援する学校やOJAB本部を見学した後、午後はウィーンの大学生とアップルパイ作りをした。OJAB職員を交えたイタリア料理店でのランチ会で、ペトラさんに満面の笑みで「you like meat, uh huh」と言われる。どうやら、肉主体のイタリア料理を僕の代わりに注文してくれそうな雰囲気。しかし、ピザが食べたかったので、「Pizza! Pizza!」と断固主張。結果肉入りのピザを獲得する。

八日目。ウィーンの国連事務局を訪問し、CTBTOのセルボ事務局長にお会いすることができた。「若い世代の国際交流が重要だ」というお話は、今回繰り返し耳にした。海外にあまり関心を持たずに、大学生活を過ごしてきたが、世界に目を向ける重要性を実感した。

濃密な9日間を過ごせたのは、紹介者の谷藤悦史教授と、主催して下さった日本友愛協会の皆さんのおかげです。同行した5名の仲間にも感謝しています。ありがとうございました。

オーストリア研修報告書

東北大学法学部3年 戸澤春奈

「無知の知」自身が今回のオーストリア研修を最も簡潔に表すとしたら、この一言を用いるのがふさわしいと考える。どこかで聞きかじった程



こちらは大胆にも、オバマ大統領に代わって執務(マダム・タッソー館にて) 荒石浩司さん



エヤップの職業訓練所では、様々な職業訓練が行われている。何としてもオーストリアの国で、生きていくために、難民の方々も熱意をもって学んでいる



訪れた教会で、コーラスの練習に遭遇。あまりの美しさに思わずシャッターを切る。これぞまさにヨーロッパ文化だと感心、感激することしきり

そのため私たち派遣学生は、OJABの活動の三本柱である、若者・高齢者・教育について様々な施設を見学してきました。記しておきたいことは山のようにありますが、この文章では私の中で今回の研修中最も印象に残った話をしたいと思います。



ウィーンと言えはのシェーンブルン宮殿を見晴らす丘で、中世にタイムスリップ？ 佐藤正幸さん

日本から非常に離れた国、オーストリアの私のイメージは、ヨーロッパの伝統的な街並みと、音楽くらいのものでした。ただその特徴に加えて、実際に行ってみて初めて感じる事ができたのは、その多様性でした。ヨーロッパ系の人々に加え、アジア系、アラブ系、アフリカ系の人々も多く見かけましたし、一口にヨーロッパ系と言ってもその出身国は多種多様でした。あまり意識したことはありませんでしたが、オーストリアは9カ国に囲まれた移民国家であり、スイス同様に永世中立国でありました。日本では対岸の火事となってしまう難民問題が、ここオーストリアでは国家の大きな問題となっていて、今ではドイツ・スイスに並ぶ難民受け入れ国となっています。只、やはりその反動は大きく、昨年の大統領選では台頭する右派の大統領候補に、現在の大統領が辛勝するというぎりぎりの選挙であったということを知りました。

難民受け入れを反対する人々は、「難民」たちは我々と違う文化を持っていて同化しようとしないう、犯罪が増える、テロを起こすと主張します。しかし、実際に同世代の難民と呼ばれる人々と話し、仲良くなると、自分の中で何かが変わりました。

ウィーン滞在7日目、OJABの職業訓練施設であるBPIに行った時、同世代ながら様々な国から来た難民たちの受けるドイツ語の授業に実際に出させて頂きました。教室は明るい雰囲気ながらも、全員が熱心にドイツ語を学んでいました。授業が終わり彼らと和気あいあいと喋っていたのですが、難民の話題になると彼らの顔が少し寂しげになりました。

「ここでの暮らしは素晴らしい。ウィーンは大好きだ。でも、いつか故郷に戻って、復興の力になりたい。」

友達として話し、その言葉を聞いた時、私の中で彼らは「難民」という得体の知れないものから、一人の人間に変わりました。



国際交流の意義は、外国の方々との交流。しかし、学校の壁を越え、同じ経験を重ねてきた仲間、これからの人生の宝物となった

知らないということは本当に恐ろしいものです。我々と同じ人間が、無意識に得体の知れない何かにすり替えられてしまいます。しかし実際にその人を知り、語り合うことそれだけで、とても大きな変化が自分の中で起きるのです。



職業訓練所で訓練を受ける若者と作業を共に体験。「難民」という得体の知れない言葉が、具体的な人と人との繋がりとして実感された瞬間

私は、人と人が心の内を明かせる繋がりを持ち、その輪を広げていくことこそが、友愛なのではないかと考えています。今回の旅ではアラブ系の難民である背景を持った学生たちだけでなく、ウィーン大学のヨーロッパ各地から来た学生たち、OJABの代表として想いを熱弁して下さったペトラさん、9日間ずっとアテンドをして下さったリサさん、そしてもちろん私を加えて6名の日本人派遣学生のみならず掛け替えのない繋がりを得ることができました。

最後にこのような素晴らしい機会を与えて下さった、日本友愛協会の皆様、鳩山由紀夫先生及び井上浩義教授、また諸般のお手伝いをして下さった羽中田様に感謝の意を示し、この文章を締めくくりたいと思います。

(3面よりつづく)

二日目からは、老人ホームや職業訓練校、エヤップの教育施設、在オーストリアの日系企業であるJTIの社員の方とのランチや、日本大使である小井沼大使の公邸、訪問、さらにオーストリア外務省、国際連合のCTBTOの訪問をさせていただきました。本当に盛りだくさんな内容で、毎日が刺激の連続でした。その中でも特に心に残ったのは、老人ホームと外務省訪問です。



何か意味が、悩みがあまりですか？ フロイトの胸像と記念撮影ユニー田島莉子さん

老人ホームでは、施設の見学やそこにお住まいの方との交流を通じて、日本の福祉問題について改めて考えさせられました。少子高齢化が長期的な社会的課題として問題視されている日本において、老人ホームは「高齢者をケアする場所」というイメージです。しかし、オーストリアで私たちが見学させていただいた老人ホームは、全く違った空間としてそこに存在していました。ホームという言葉通り、そこは生活の場であり、個人の意思を尊重した生き方が実現していたのです。



在オーストリア日本大使館大使公邸にて。小井沼大使には貴重なお時間を戴くことができました。数多い体験のなかでも、記憶に刻まれる貴重な体験であった

外務省では、オーストリアをはじめとして多くのヨーロッパの国々の課題である難民問題についてのプレゼンテーションを拝聴させていただきました。オーストリアに行く前は、周囲を海に囲まれ、政治的にも難民を受け入れない姿勢をとる日本に住む私たちにとっては、あまり馴染みのない話題でした。



エヤップの運営する職業訓練所にて。難民の方々が安定した生活を営むには、職を得ることが必須。そのため語学学習、職業訓練にエヤップは力を注いでいる

印象的なのは、「私たちが出来るのは、日々苦しんでいる人がいるということにより多くの人に知ってもらえるよう努力し続けることです」というペトラさんの言葉と、「政府が創出した難民の雇用や教育の機会をきちんと機能させ、それらを普及させるためには、民間人による受け入れと許容が必要不可欠だ」という官房長官のお話です。難民問題という大きな問題に私たち一般市民がどう対峙し、関わっていくのか。それはこの問題を解決に導くにあたって、私たちが想像していた以上に重要な要素であるという実感が湧きました。

九日間を総合して、最も私の心に残ったのは、何事もたくさんの人の助け合いと相互扶助によって成し遂げられているということでした。その助け合いは、相手への思いやりや慈愛で満ちたものです。自分には関係のないことであると目を逸らして生きていくのではなく、機会や場所を分かちあうことこそが、友愛の実現に繋がると感じました。

繋がり

慶應義塾大学医学部一年 佐藤正幸

私たちの今回の派遣も、関わってくださった多くの方々のおかげで無事成し遂げることが出来たと思います。この感謝の気持ちを忘れず、次は私たちが誰かや何かの役に立ち、友愛を伝承出来るよう尽力したいと考えます。

オーストリア勤労青年連盟 (OJAB) は日本友愛協会と同じように、「汎ヨーロッパ思想を著したグーテンホフ・カレルギーの「友愛」の理念を掲げています。

2017友愛国際写真コンクール 応募受付開始!!!!
詳しくは同封のチラシをご覧ください
ホームページ / yuaiyoukai.com から投稿可能です!!

機関紙『友愛』にご投稿ください!

機関紙『友愛』編集部では、皆様のご投稿をお待ちいたしております。写真も大歓迎です。皆様の『友愛』に奮ってご投稿ください。

- 時事川柳 服部迪夫 作
- 核ボタン一番怖い掛け違い
- 藤井四段 突き抜ける強さを持った十四歳
- 習近平存在感を増す世界
- 「一带一路」
- 眞子さまは身近な人を選ばれる
- 地球規模 難民と移民との差考える
- 赤ちゃん誕生 上野からパンダに託す近未来
- 麻央さん逝く 感動は生きた長さの尺度超え
- 「脱・大日本主義」を 上梓 理事長が真情吐露する最新

◆時代の変化は青年の強烈なエネルギーから始まる。明治維新は黒船が発端ですが、龍馬や西郷、そして松下村塾の英傑たちが成し遂げました。戦後、日本人に希望と勇気を与えたのは政治家や財界人ではなく、水泳の古橋、プロレスの力道山、ボクシングの白井たち。湯川博士のノーベル賞でした。変化の節目は若者を先頭とする市民の活力如何により決まります。スポーツ界でのヤングパワーや藤井四段の新記録、そして都議選の結果はオリンピックを待つまでもなく新しい潮目の予兆かも知れません。政治も経済も一日も早く梅雨から抜け出し、スッキリとした青空になるよう期待します。

◆ ミャンマーからの研修生三名が無事二ヶ月間の研修を終え帰国しました。一ヶ月は鹿児島、その後京都、大阪、軽井沢と毎日会っていた訳ではないのに、何故か帰ってしまうと寂しい感じがします。民族衣装に身を包んだ三人の若者はそれはそれは美しく、輝いていました。そして細い！胴回りなど、私の半分と言っても過言ではない細さです。そう言えば最初に一緒に食べたお昼の天丼も、ご飯は半分でした。以来、日本での好物は？ と聞かれると「テンドン」と答えていたそうです。建国の意気に燃えて帰った三人、頑張

